**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第１回　（２０１４年６月１７日）**

『ラーマクリシュナの福音』を勉強することは、ヒンドゥ教徒やラーマクリシュナの信者だけでなく、宗教が好きなすべてのひとにとても良いことです。インドはもちろんさまざまな国で、信者たちは『ラーマクリシュナの福音』の勉強会を始めています。そして今日、日本でも始まります。

では本文に入る前に、「第二版の出版のことばと序文」を読みすすめながら、『ラーマクリシュナの福音』の特徴や雰囲気をつかんでいきましょう。

**・第１回の勉強範囲：「第二版の出版のことばと序文」(5)~(8)頁**

・📖（読む）**「とにかく『ラーマクリシュナの福音』を読んでごらんなさい」**

**これはシュリー・ラーマクリシュナの愛弟子スワーミー・ブラフマーナンダの助言である。ベンガル地方の田舎町を訪れたときのこと、若い信者が妹を連れて、駅で汽車を待つスワーミーを見送りに来ていた。「マハーラージ、これは私の妹ですが、いままでマハーラージにお会いする機会がありませんでした。何か助言を頂けますでしょうか？」こう信者がお尋ねすると、スワーミーは彼女に言った。「娘よ、いまは詳しく教えている時間はないが、とにかく『ラーマクリシュナの福音』を読んでごらんなさい。霊性の生活と心の平安に必要なものがすべて見つかるから」**

**また別の機会に、スワーミー・ブラフマーナンダはこうも言われた。「私はたった一つの文章だけで、ブラフマギャーナ（ブラフマンの知識）を教えることができるよ。その文章は──『ラーマクリシュナの福音』を読んでください──たったひと言だ」**

（解説）

最初に引用した二つの話は、なぜ『ラーマクリシュナの福音』を勉強するのか、その勉強のやる気・モチベーションを高めるために紹介したものです。我々の心の平安と霊的生活のために、『ラーマクリシュナの福音』の勉強はとても重要であること、また『福音』にはすべての聖典のエッセンスが入っていること、これらがうかがえると思います。

（協会から出版されている）バガヴァッド・ギーターの本の最初には二つの節がのっていますが、下のほうの節を見てください。「サルヴォーパニシャッドー　ガーヴォー　ドーグダー　ゴーパーラ・ナンダナハ　/　パールトー　ヴァッツサハ　スディール　ボークター　ドゥグダン　ギータームリタン　マハット」──「（日本語訳を読む）全てのウパニシャッド聖典は牝牛であり、それから牛乳を搾り取るのは牧童であるクリシュナである。プリターの息子（アルジュナ）は、そのミルクを飲む子牛であり、清らかな知性を持つ賢者たちも同様にこのミルクを飲む。この甘露のミルクこそが、偉大なる不滅のギーターなのである」

牝牛のエッセンスは牛乳です。ウパニシャッドのエッセンスはバガヴァッド・ギーターです。それと同じ例。すべての聖典のエッセンスが『ラーマクリシュナの福音』に入っています。聖典をいろいろいっぱい勉強しなくても、『ラーマクリシュナの福音』をひとつ勉強するだけで、人生のサポートを得ることができる。人生のサポートはなんでも『ラーマクリシュナの福音』に入っています。『福音』たったひとつで、我々は人生の助けをもらうことができるのです。

ここではブラフマーナンダジの助言だけを紹介しましたが、すべての出家・在家の直弟子たちが同じ助言をしていることを付け加えておきます。

・📖（読む）**ベンガル語のタイトル**

**『ラーマクリシュナの福音』は英語版 “The Gospel of Sri Ramakrishna” の邦訳だが、その原典はベンガル語で書かれており、 “Sri Sri Ramakrishna Kathamrita” すなわち「シュリー・シュリー・ラーマクリシュナの甘露のような言葉」という比喩に富んだタイトルが付けられている。「甘露」とは飲んだ者を不死にさせる妙薬のこと。甘露のような彼の言葉を学ぶ者は霊的に不死になるだろうというのである。**

（解説）

まず、ベンガル語のタイトルですが、「カタムリタ」ではなく、「**カタームリタ**」が正しい発音表記です。

次に「甘露のような」について。

『ラーマクリシュナの福音』は甘露のようであるというアイデアがあります。聖典が言っている甘露の意味は、それを飲んだ者は永遠になるというものです。実際に甘露があるかどうかはわかりません。しかしそのアイデアがあります。

・📖（つづきを読む）**近代インドの聖者として知られるシュリー・ラーマクリシュナだが、その言葉は現代人をも苦悩、疑い、恐れ、不安から解放する。それは、喜びと平安のうちに人生の課題を乗り越えていくための、勇気と力と霊的知識からなる、まさに甘露そのものなのである。**

（解説）

「**甘露になる**」のもうひとつの意味は何ですか？

肉体的レベルで「甘露になる」ことはできませんね。肉体は一時的なものであり、永遠ではありませんから。それは５つの要素（地、水、火、風、空）を混ぜて作られたもので、それら要素は一時的なものであるのですから。一時的とは、始まりがあり、衰えがあり、終わりがあるということ。肉体にも誕生があり、成長があり、衰えがあり、死にます。肉体的レベルでは永遠になることはできません。では何のレベルで永遠になるのか？

それは魂のレベルで、です。この文章はそのことを言っています。『ラーマクリシュナの福音』を読めば、我々は霊的なレベルで永遠になることができる、それを理解することができます。

では「**永遠になる**」とはどういう意味でしょうか？　それは**気づきです、我々はアートマンであると気づくこと**です。

しかしふつうはその気づきがなく、身体と自分を同一視しているので、身体がなくなると自分もなくなると思い込み、死を恐怖に感じます。

ですが自分をアートマン（内なる自己）と同一視したらどうでしょうか？　アートマンは永遠です、だから自分も永遠である、という考えになりませんか？　しかし残念ながらその考え方は一般的ではない。でももし、『ラーマクリシュナの福音』を勉強しますと、その気づきがあらわれます。

そしてもうひとつ。

その気づきは**安定した気づき**であることが大事です。

「時々」ではない、「安定した」気づきです。

そうでないとあまり結果は出ません。ですから何回も何回も勉強してもらいたのです。そのように『福音』を何回も何回も勉強しますと、安定した気づきがあらわれ出ます。

ですが普通の求道者には、時々あらわれるのみです──みなさんは『福音』の中に池の例があるのを覚えていますか？　池の表面が藻でおおわれていると、池の水はまったく見えない。藻をどけると水は見えます。しかしすぐに藻はまたいっぱいになって、水は見えなくなる。我々の知識はその池の水みたいです。ときどきあらわれ、すぐまた見えなくなる。無知（マーヤー）で知識を隠されているのが我々なのです。それが我々の普通の状態。

『ラーマクリシュナの福音』を何回も何回も勉強してください。そうすれば、安定した気づきを得ることができます。

『ラーマクリシュナの福音』を勉強するという意味は深い。その勉強だけで永遠になることができる、という意味なのですから。

・📖（読む）**『福音』の学び**

**『福音』の学びはたんに読むだけではない。甘露の言葉をそしゃくし、おぼえ、実践することが大切だ。一見単純で素朴なシュリー・ラーマクリシュナの言葉だが、実はそれらは非常に深淵である。**

『福音』を多少なりとも読んでいるが、ほとんど変化しない人がいます。もしかしたらそれはただ読んでいるだけではありませんか？　**読むと勉強、何が違いますか？**

・📖（つづきを読む）**だから一気に読んで仕舞い込んでおくのではなく、言葉をみ締め、人生の上でできるだけ実践しながら、ゆっくり、慎重に、繰り返し読んでいただけたらと思う。**

忙しい、時間がないからと言って、早く読む。あるいは、一度読んで、間をあけて、また読む。このやり方ですと、あまり結果は出ません。ではどのように勉強したらよいでしょうか？

　ひとつは、ゆっくり**ゆっくり読む**ということ。もう一つは、**考えながら（thoughtful）読む**。そして**何回も（repeated）読む**。まずその**３つのポイント**です。ゆっくり、深く考えながら、何回も、を同時におこなう。

そして**４つ目のポイントは、自分の経験の前後関係で読み深める**こと。

**最後のポイントは──「人生の上でできるだけ実践しながら」**──読んだ内容を自分の中にとり入れ、そして実践すること。それが大事です。

・📖（つづきを読む）**すると読むたびに、新たな理解が生まれ、精神的、霊的に価値のある人生を送るための実践的ヒントが得られるだろう。真我、世界、神への理解がもっと深まるだろう。**

『福音』がおもしろいのは、読むたびに必ず新しい理解が得られることです。当初読んだときの理解と、次に読んだときの理解の成熟度が違う。そして何回も何回も読み返すと、突然新しいアイデアが出てきて、ますます理解が深まっていく。理解が深まって、また読み返すと、また新しいアイデアが出る。そのかんじ（**mutual practice　相互的に理解を深めていく）で勉強すると、大きなインパクトがあります**。

それだけではなく、『福音』にはモラルアンドスピリチュアル（道徳的と霊的）の実践的ヒントがたくさん入っています。

・📖（つづきを読む）**『福音』の学びとは、このようにゆっくりと、しかし確実に、そして自然に、霊性の生活の質を高めてくれるものなのである。**

そうです、無意識のうちに本当に変化します。無意識に、自然に、そして絶対に変化します。

ラーマクリシュナは言っています、私は毒をもつ蛇ですと。一度かまれれば（すぐではないかもしれないが）最終的にはあなたは死にます。

「死にます」の意味は何ですか？

「永遠になる」という意味です。

・📖（読む）**近代におけるシュリー・ラーマクリシュナの降誕**

**いにしえの偉大な師たち──シュリー・クリシュナ、仏陀、キリスト、ムハンマドのような──の教えには永遠の価値があり、それは疑いの余地はない。だが、社会が劇的な変化をとげたこの現代に、果たして当時の教えがそのまま実践されうるか、という問いも残る。『ラーマクリシュナの福音』にその答えが見つかるのは、シュリー・ラーマクリシュナが近代に生まれ、我々の生活のさまざまな問題を十分にご存じだったことにある。**

昔の社会にももちろん問題はありましたが、その中身は今とはまったく異なっていました。現代の社会はグローバルにつながって、我々の手にあまるほどの大きさになりました。それに社会のやり方や考え方はとても複雑になり、競争に満ちたものに変わりました。貧困という経済の問題はあったものの、シンプルな生活であった昔にくらべ、今は生活のスピードが速く、インターネットや携帯の出現でますます加速して、影響は身体だけでなく心にも及んでいます。

このように、複雑で競争に満ち高速化した現代社会は、心に過度のストレスをかけ、心の問題はいまや子供たちにまで広がっています。これは日本でもインドでもヨーロッパでも同じ。このように社会はとても変化しました。それはいま、我々自身が体験していることでありましょう。

もうひとつ。今と比較すると、昔の社会には、楽しむものがあまりありませんでした。

昔は「楽しみを探すなら天国に行ってください」という助言があったほど！（笑い）聖典も「天国、天国」と助言をし、皆、一生懸命に神様に祈っていました。

でも今は、天国はもはや楽しみの場所ではないです。お金があれば、楽しみをすべて楽しめるから。確かに天国の神様は、我々よりも少しだけ長生きかもしれません。ですが違いはそれだけ。（笑い）今の社会の特徴は、いかにして世俗的な楽しみを得るか。

でも、本当は、世俗的な楽しみを得れば得るほど心はますます落ち着かなくなる、欲が増えれば増えるほど苦しみや悲しみも増える・・・。これが現代社会の矛盾、問題なのです。

これらを考えれば、いにしえを生きたお釈迦様やイエスが言ったことと、現代のラーマクリシュナが言うことは少し違うのが分るでしょう。

ラーマクリシュナは現代の社会に生まれましたから、現代の社会を知っています。現代人への助言があります。

もちろんイエスもお釈迦様も「永遠」や「神様」について語っていますが、現代社会の問題をどのように解決するか、その助言をしているのは『ラーマクリシュナの福音』なのです。社会の問題、心の問題、仕事の問題、人間関係の問題への助言は『福音』の中にたくさん詰まっているのです。

・📖（つづきを読む）**いまの社会を生きる人びとにとって必要な人生や霊的修行の実践について、貴重な提案が盛り込まれているのだ。それは、ヒンドゥ教徒以外、あるいはシュリー・ラーマクリシュナの信者以外の人々にとっても、『福音』の学びが有益であることを意味する。**

そう、普遍的なのです。

・📖（つづきを読む）**たとえば、本書を読んだことにより、失われていた聖書に対する興味が回復し、より深い信仰とイエスへの理解を得られたキリスト教徒の例などもある。**

本当にこのような結果が起きています。ふつう、キリスト教の信者は神父から宗教を勉強します。しかしそれはたいてい、教会のことを考慮したキリスト教の教義で、教会の教えはイエスの教えとは異なります。

たとえば教会が言う「罪びと」についてのアイデアですが、聖書の中には「罪びと」とは書いてありません。それどころか「天国はあなたの心の中にある」と反対のことを言っています。それならなぜ神父は「罪びと」と言うのか。それは、私たちは罪びとですからイエスに従わなければならない、イエスに従わなくてはならないですから教会に来てください、そのことを言うためです。

もし、ある信者が神父からこれを聞いて、気持ちよくなければ、その人はイエスやキリスト教からだんだん離れていきます。そしてやがてヴェーダーンタの『ラーマクリシュナの福音』を読んで、本当にこれは素晴らしいと感じたとき、イエスを尊敬する思いが戻ってくるのです。『福音』には霊的な話だけではありません。宗教の偉大な人びと、たとえばイエスも出てきますね？　イエスとラーマクリシュナは同じ人。そのことを考えれば、このキリスト教徒の思いがおのずと分ります。

・📖（読む）**『福音』の実録**

**M(マヘンドラナート・グプタ)は長年の習慣で入念に日記を書き続けており、その日記に、師シュリー・ラーマクリシュナと会ったときに見聞きしたことの概略も記していた。この日記をもとに書かれた『ラーマクリシュナの福音』は、イエスや仏陀に比肩する霊性の師のお言葉を存命中に忠実に記録した、聖人伝史上はじめてのものと言えよう。**

**Mは、シュリー・ラーマクリシュナの伴侶シュリー・サーラダー・デーヴィーを含め、つねにそばにいて師をよく知っていた人びとからも確証を得て記録していたが、後年になってからの批判に、「シュリー・ラーマクリシュナの言葉の記録とされる『福音』は、無学なシュリー・ラーマクリシュナではなく、高い教育を受けた学識あるMが書いた部分があったのではないか」というものがあった。が、こうした批判は言うまでもなくまったく根拠を欠いた奇妙なもので、他に意図があったのではないかと疑われる。事実、『福音』の記録作業は、シュリー・ラーマクリシュナご自身が後世に伝えるべくMをもってなされたものだ、ということを示唆するヒントが、この『福音』のいくつかの場面やMの対話集からうかがえるのである。Mは、この偉業を遂げるために相当の年月を費やした。**

**こうしてMは、世界中の求道者と悩める魂のために、『ラーマクリシュナの福音』という巨大な霊性の宝庫をすという、後代に残る恩恵をもたらした。聖書の福音を記録したマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと同様、Mは不朽の名声を残すことになったのである。**

聖書はイエスの死んだあとに書かれました。そのうえ、それはバラバラでした。

『ラーマクリシュナの福音』は、Mさんがうちに帰ってその日に書き留めたものでした。時には長い時間かかって、時には寝ないで、朝まで書きました！　あとではない、その日に！　その日にノートしたので、ミスの可能性はほとんどなかったですね。あとで、そのノートを見て、書き起こしました。

これがほんとにおもしろい。

たとえばイエスの教えやお釈迦様の教えを読みますと、それは教えだけ。そのときの雰囲気は何も書き残されていません。

ダイヤモンドはベルベットの特別なケースに入れると、より光り輝き、美しく見えますね。『ラーマクリシュナの福音』もそれと同じ。

イエスもお釈迦様もみな高い教えですが、ベルベットのケースがなかった。

**『ラーマクリシュナの福音』にはベルベットのケースがあります**。背景や周囲の様子や雰囲気のことについて、とても詳しく書いてあります。そしてそれがとってもおもしろいのです。

・📖（読む）**ラーマクリシュナのメッセージの舞台**

**Mは師の会話を忠実に記録しただけではなく、時代や場所、師の姿勢や気分、まわりの人びとなどの背景も記している。ガンガーの静かな流れやその波のささやき、花畑の香りや色、松林に吹く微風、寺院に鳴り響く鐘の音、それらのすべてがあたりに霊妙な雰囲気をかもし出し、師を中心にした『福音』の舞台を彩り豊かに描き出している。また、瞑想中に修行の助けとして師をイメージできるよう、意図的にシュリー・ラーマクリシュナのまいをつぶさに書き加えたことはM自身が明かしている。**

『福音』の主な舞台であったドッキネッショル寺院は、コンクリートで補修されるまでは当時と同じ印象が残っていました。しかし今は雰囲気が少し異なっています。

・📖（つづきを読む）**特筆すべきは、シュリー・ラーマクリシュナの言葉を自分なりに解釈したり、自らに焦点を当てようとする誘惑を抑え、「記録者M」としての態度に徹したことである。深く読むと、実は問いかけの形で示唆に富んだ自身の解釈をほどこしていることを発見し興味深いのであるが、シュリー・ラーマクリシュナだけの焦点を絞り、自らは匿名Mに徹した彼の態度を、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは高く評価した。**

**その一方で、師から自分の考えや行動をたしなめられた際のMは、隠しだてをしなかった。**

あるときラーマクリシュナはMに尋ねました、「あなたの奥さんには知識がありますか？」。Mは答えた、彼女は申し分ないが知識はあまりない、と。それを聞いたラーマクリシュナははっきりと不満を示して叱りました、「ではあなたには知識があるのですね」（👉『福音』６頁）。

その頃のMさんは、ふつうの人と同様、知識とは学校で勉強する知識だと思っていました。知識がある・ないは、学校や大学で勉強したかしなかったかという意味だと。しかしラーマクリシュナの考えでは**知識とは、「永遠」について知っているか知らない**か、というものだったのです。

そして会話が進んでまた、Mが叱られる場面が出てきます。土の像を礼拝する人びとには像は神ではないことを教えなければならない、と話したのです。人に教えを授けることなどあなたには必要ない、あなたは自分の知識と信仰を求めて努力したほうがいい、Mはそのようにラーマクリシュナに言われたのです。（👉『福音』７頁）

これらのことでも分るように、Mさんは、何も隠し立てをしなかった。率直に書いた。その点が本当に特別です。

・📖（つづきを読む）**さらに、道徳的、霊的な高い視点から師が発した、当時の社会的著名人の行動に対する批判も、その信奉者の感情を害することなく大胆に書き入れている。**

そう、これはとても勇気が必要なことです。

たとえば、当時のヴィディヤー・シャーゴルやデヴェンドラナート・タゴールはとても有名で、信奉者がたくさんいました。ラーマクリシュナは霊的な見方で率直にものを言っていましたが、そのまま書けば信奉者たちは怒るかもしれません。しかしMは、師の言葉を隠さず、そのまま書きました。信奉者たちの反応を気にせず、怖がらず、ぜんぶ率直に書きました。

（『福音』勉強会第１回、以上）